

「センター」としての「絵」

大倉宏

絵はいろいろな経緯で家にやってきます。あるいはあります。

買った、もらった、描いたなど。また絵は多くの場合、額に入れられています。ひと昔前はかけ軸、屏風、襖などに仕立てられた絵も多くありましたし、数は減りましたが今もあります。

額装、あるいは表装のされていない（かけ軸、屏風、襖などに仕立てられていない）絵を「シート」、「まくり」などと言います。油絵やアクリル画などでは最近、制作者の意向で木枠に張られたキャンパスのままで、あえて額をつけず販売される場合もありますが、それらも含め、壁にかけ、下げることでできる状態のものを便宜上ここで「絵」と書くことにします。

額にはかける、吊るすなどするための仕掛け（紐や金具）がついています。仕掛けを用いず、たてかけられる場合もあるでしょうが、その場合も含め「絵」は、家、あるいは部屋の中にひとつの位置をしめ、一定期間（長かったり短かったりするでしょうけれど）固定されます。

固定された「絵」は、家、部屋の中でどのようなものとして在るのでしょうか。昔からあり、場所の一部となっていて、特段意識もされなくなってしまう「絵」もあれば、誰かに「コーディネート」され、インテリアの一要素（ポイント）として配された「絵」もあるでしょう。同居人中には「絵」に関心ある人もいれば、無関心な人もあるでしょう。人によって「絵」の価値も違う。だから一様に説明はできないと考える人もあるかもしれません。

砂丘館の指定管理者の一員である認定 NPO 法人新潟絵屋は、共同運営の画廊として、これまでいろいろな展覧会を開催してきました。こうした展覧会では、「絵」が「購入」によって、家に移るということが起こります。以下はそのような場合を主に想定しています。

購入した人に関心を向けられ、迎えられ、家のある場所に固定された「絵」は、その人にとって、それ自体関心の対象なので、どこに固定されても変わらないとも言えそうに思えます。台所、階段、床の間、トイレ、どこにあっても「絵」は変わらないと。けれど実際には、場所を変えると、「絵」は変わります。「絵」を買い、家で固定したことのある人の多くはそれを、体験として知って

いるはずで、「絵」自体は同じだとするなら、何が変わるのでしょう。

長くその問題を考えてきて、ようやく、ぴったり納得いく考えに会いました。

それがクリストファー・アレグザンダーの「センター理論」です。「センター」は「中心」です。アレグザンダーは「場所」は複数の中心＝「センター」でできていると考えました。改札、階段、ホームは、それぞれが駅という場所の「センター」です。日本間と言えば、床の間や棚、人が出入りする戸口、座卓などが「センター」になります。そこに人がいて、話をしているなら、その人も「センター」です。「センター」は形の輪郭の内部に閉ざされた実体を中心としつつ、それがなんらかの影響を及ぼす範囲を含む磁場的なひろがり全体を指す概念です。

そして場所とは、それらの「センター」同士の関係性によって編まれている実体だとアレグザンダーは考えました。たとえばひとつの部屋はそれ自体が、ひとつの魅力ある全体として感じられることがあります。足を踏み入れた瞬間に、はっとなにかを感じる時、人はその全体に魅了されているのです。そのとき部屋はそれ自体がひとつの大きい「センター」なのですが、その「センター」は、それを構成する局所的な「センター」を入れ込みに抱え持ち、またそれら局所的な「センター」同士は互いに関係しあっています。局所的な「センター」には力強い（生命力の強く感じられる）ものと、それほどでもないものがありますが、力の強弱は、実は個々の「センター」単独で定まっているのではなく、相互の関係性の変化によって変わります。つまり、どんな「センター」も単独ではそれを明確に定義できないのです。

「センター」は他の「センター」によってのみ定義することができるある種の実体なのです。

とアレグザンダーは書いています。（クリストファー・アレグザンダー著、中埜博監訳『ザ・ネイチャー・オブ・オーダー 建築の美学と本質 生命の現象』鹿島出版会 p116）

出会いがあり、購入し、家に持ち帰られ、固定された「絵」は、それ自体がその人の心を引き付ける「生き生きしたもの」、つまり「センター」です。しかし、アレグザンダーの理論によれば、その「センター」の「力強さ＝生命」はその場所（部屋）にある他の「センター」と関係しあいます。関係の在り方によって「絵」の魅力が、生命力が変わります。場所が変わると「絵」が変わる

という実感がそれを証しています。

「センター」の「生命」や「強度」は、隣接する「センター」の位置関係や強度によって増大したり減少したりする。結局、「センター」は、それらがつくる「センター」がお互いに補い合うことでもっとも強まる。(同書p122)

「絵」が固定される場所に、ほかにどのような「センター」があるのか、その「センター」との関係（位置関係やそのほかの関係）によってどう変わるかは、実際にいろいろ「絵」の場所を動かしながら「絵」を見ることで、「感じる」ことができます。

「絵」はどこにあっても変わらない、同じだと思い込んでしまうなら、どこに固定されてもいいはずですが、一旦、部屋という場所の中で、ほかの「センター」との相互関係に注意しながら、「絵」を部屋という「センター」を構成する局所的センターとして眺めてみると、その「絵」に相応しい（もっとも生き生きして見える）場所が次第に見つかってきます。実際に日常生活が営まれる空間である家では、生活する人自身もまた「センター」です。立っていることが多いのか、座っていることが多いのか、寝る場所なのかで、人という「センター」と「絵」という「センター」の関係もまた変わります。

「センター」は、他の「センター」によって豊かな生命を得るのだとアレグザンダーは言います。「絵」は様々な「センター」が関係しあいながら存在する家という場所で、それを気に入って得た人にとって、展示室で見た時とはまた違った魅力、生命をその家から得ることができます。同じ壁や向かい合う壁に、違う「絵」をかけたり、置いたりすることでも、そのような生命力の高揚や（時には縮減）を体験することがあります。きれいな、美しい、迫力がある、繊細、緻密など、一枚の「絵」の魅力は多様ですが、その魅力を家という複合的で全体的な「センター」によって増強させて、感じる、楽しむことが「え・いえ」をいわば呼吸する喜びなのだと思います。

最後に「額」の意味について、アレグザンダーの興味深い言葉を引用します。「境界」の語を額に重ねて読んでみてください。

「センター」を囲む「境界」の狙いはふたつあります。まず第一に、その囲む「センター」に

目を向けさせ「センター」を形成します。それは、囲みを生み出すことで「センター」をつくり出し、強化する力の場をうみ出すわけです。第二に、「境界」で囲まれた「センター」とその「境界」を越えた外側の世界を結びつける役割も果たします。このためには、まず囲んでいる「センター」と「境界」は区別される存在でなければなりません。そして、それは囲んでいる「センター」を守りつつ、外側の世界とも区別されていなければなりません。しかも、同時にその「境界」の外側の「センター」とも結合する力を維持していなくてはなりません。「境界」は結合と分離を同時に行うのです。このふたつの作用により、「境界」で囲まれた「センター」は増強されることとなります。(同書p 158-159)

今回の「え・いえ」の会場では、「絵」と部屋/家を全体として眺めつつ。そんな額の作用にも注意して「絵」を見ていただけるとうれしいです。

また家にある注意されなくなった「絵」や、飾られなくなった「絵」なども、場所を変えたり、周囲を変えたり、あるいは新たに固定してみることで、家が抱擁するさまざまな「センター」の力によって、新しい生命や輝きを得ることがあるということをも認識していただく機会としていただけると幸いです。